



目 次

図書館をめぐる諸問題・・・・・・・・・・	1	トピックス・・・・・・・・・・	10
図書館を見て感ずること・・・・・・・・	4	本学関係教官寄贈著作物・・・・・・・・	12
図書館でホットチョコレートを！・・・・	6		
図書館の名称変更と事務組織再編について	8		

図書館をめぐる諸問題

山口大学図書館副館長(経済学部教授) 河野 眞治

図書館が大学における研究教育の中心的位置を占めているのは、昔も今も変わらないと思うが、しかし現実はその単純ではないようである。最近読んだジョークに次のようなのがあった。ブッシュ大統領がヒラリー・クリントンの自伝「Living History」を読んで、ヒラリーがクリントンと初めて会ったのはエール大学の図書館だったと述べているのに対し、「それは捏造だ。何故ならエール大学には図書館などないからだ」と言った。大学時代に成績が悪かったブッシュ大統領を揶揄したものだが、図書館に行くことが勉強することと同義だったということであろうが、今は必ずしもそういえないだろう。

まず私の周りの最近の学生の傾向を見ながら、図書館と学生の関わり方について述べてみたい。学生が本を読まないと言われるようになって久しいが、最近5年間の学生の図書館利用の統計を見ると(1表、2表)、減少傾向は感じられる

が、激減しているという感じでもない。学生数8千-9千人としても、年間一人10冊程度借りていることになる。周りの学生を見ていると、感覚的には学生の実態は少し違っている感じがする。

私も学生にレポートを課すことがよくある。まず何の注意もしなければ、かなりの学生が本や論文の一部を写し、あるいはそれらを組み合わせてレポートを作成してきていた。レポートは、読者は私一人でもれっきとした公文書であり、出典を示さず勝手に引用すると盗作だ、と「脅し」てもあまり効果はなかった。結局そのようなレポートを見つけ、単位がもらえないという実例が、一定の抑制効果を発揮する。また殆どが引用でもかまわないから、とにかく引用部分に「」を付けることと参考文献を最後に示すことを繰り返し指導した。最近の特徴は、参考文献欄が殆どインターネットのホームページ

表1 利用者数

	学生	教職員	その他	合計
平成15年度	599,301	20,536	15,352	635,189
平成14年度	645,234	20,592	12,622	678,448
平成13年度	668,442	19,889	5,632	693,963
平成12年度	692,277	21,295	3,539	717,111
平成11年度	605,299	22,053	2,739	630,091

注)平成13年度に「その他」が急激に増加しているが、その理由としては

- 1.平成13年規則改正を行い、総務省へ学外者の利用を届け出た
- 2.平成13年より大学祭に合わせ、オープンライブラリーを行い、学外者へ利用促進を呼びかけた

以上の二点が挙げられる。

表2 貸出冊数

	学生	教職員	その他	合計
平成15年度	91,419	7,049	1,349	99,817
平成14年度	100,833	8,292	1,248	110,373
平成13年度	100,156	9,591	1,155	110,902
平成12年度	98,904	9,481	751	109,136
平成11年度	95,571	8,888	534	104,993

注)平成13年度に「その他」が急激に増加しているが、表1と同様の

理由によるものである

になってきたことだ。インターネットは使い方によってはものすごく便利だが、変なページもたくさんある、玉石混淆である。レポート内容が変なので参考文献のホームページに行ってみると、ホームページがでたらめというのが時々ある。最悪なのは既にレポート形式の文章が存在し、クリック、コピーして作成してくる例がある。私自身がレポートテーマのキーワードを入れ、いくつかの検索エンジンで文章をチェックしておくという仕事が増えた。私も同じことをしてチェックしますよ、と忠告しても必ずそのようなレポートが見付かる。このようなレポートを見ていると、論文を「写して」いる学生は何だか勉強している感じがしてくる。彼らはとにかく「読んで」いるのだから。そんな中に、本や論文を参考文献に挙げ、他人の意見と自分の考えの違いを明確にしたレポートに出会うと

本当にホッとする。このようなレポートも必ず出てくるので、昔ながらの勉強方法をちゃんとしている学生もいるということだ。いずれにせよ、学生が圧倒的にインターネットで「勉強する」ようになったということだ。

本や論文を読ませようと思ひ、最近では MagazinePLUS と Webcat の使い方をかなり丁寧に教えている。しかしこれらをちゃんと使いこなしている学生は稀である。最初はどこがネットワークなのかよく分からなかったが、一人一人の学生について作業を見ていくと、キーワードの入れ方がまずい、雑誌名が分かっててもその雑誌がどこにあるか探せない、山大にないとそれで終わり、などである。特に山大の中で雑誌がどこにあるか見つけられないでつまづいているのが多かった。感じたのは、行き詰まったとき、もう面倒

くさくなって次に行こうとしないことである。彼らに利用させようと思うなら、本当に使い勝手がいいような配置に資料を並べてやらないといけないのかもしれない。他大学までわざわざ出かけてコピーをしていた昔を考えると、今はめっちゃくちゃ便利になっているのだが、そんな理屈は通じない。

図書の整備の側面から最近の困難な状況を見てみよう。図書の年間受け入れ冊数は減少傾向にある中で、平成15年度に激減している(3表)。この年「教育用図書費」が全くなかったのが大きく影響しているが、減少傾向の方が長期的にはより重要な意味を持つ。雑誌についても金額はともかく、受入数は急速に減少している(4表)。金額が同じなら値上げ分だけ減らさざるを得ないということである。14年度の増加部分は電子ジャーナルの購入に当てられた分である。

資料整備にお金がかかるのは当然であり、また法人化されて大学財政が今大変な困難に遭遇していることも誰もが承知していることである。ただ図書館は依然として大学の研究教育の中心であり、何をおいても充実すべきものであり、支出計画で特別の位置が与えられるべきであり、その必要経費は水道代や電気代と同列に論じることはできないと思う。そう考えても無い袖は振れない、ということはあるだろう。最近アメリカの議会図書館の歴史を書いた本を読んだ(藤野幸雄『アメリカ議会図書館』中公新書)。1970年代に連邦政府の財政赤字が深刻になる中で、議会図書館も予算削減という現実と直面し、何らかの改革が必要となった。同書によれば改革の一つの中心は、それまでの何でも資料を集めようという「完全網羅」主義はもう不可能ということを確認、資料収集の優先順位を明確にすることだった。議会に対する奉仕を最優先とし、学術研究については全国的ネットワークで資源集積を計るとしている。時代も図書館

の種類も違うが、金がないときやることの本質は変わらないであろう。この間図書館では特に雑誌の購入について全学的に議論してきたが(減らすということだけの議論だったが)、全てを山大内に確保するという事は不可能だから、優先順位を付けて購入していくということが必要になっていくだろう。ただ総合大学として多様な教官研究者がいる中、何が重要かを決めるのは困難を極めそうだが。

購入されたものが利用されるということも重要なことである。図書館のホームページでいろんなことが出来るようになってきている。私は恥ずかしながら、ここで日本企業の有価証券報告書が読めることを最近まで知らなかった。電子ジャーナルなどもあるいはもっと宣伝が必要なかもしれない。問題だけは少しずつ分かってきて、今のところため息だけをつけているこの頃である。

(かわの しんじ)

表3 図書購入冊数及び金額

	年間受入冊数	金額	蔵書冊数
平成15年度	8,919	53,196	1,552,409
平成14年度	17,441	96,267	1,623,544
平成13年度	19,532	98,289	1,603,605
平成12年度	17,890	91,198	1,578,406
平成11年度	19,057	93,443	1,551,090

注) (金額の単位：千円)

- 1.上記には研究用、教育用の両者を含む
- 2.平成15年度、大学本部からの教育用図書費は0査定であった
- 3.蔵書冊数には年間払出(管理換、廃棄等)を含む

表4 雑誌購入種類数、金額及び所蔵点数

	年間受入種類数	金額	所蔵種類数
平成15年度	3,892	242,149	29,501
平成14年度	4,672	250,943	29,432
平成13年度	4,766	195,256	28,931
平成12年度	5,243	196,413	28,785
平成11年度	5,307	195,582	28,545

注) (金額の単位：千円)

平成14年度から電子資料(基盤雑誌)を開始した

図書館を見て感ずること

埋蔵文化財資料館長(人文学部教授)中村 友博

山口大学で図書館といえば、自分は総合図書館しか知らない。宇部にある2館は行ったことも見たこともない。たいていの大学には図書館とは別立てで学部や学科が独自に付設する図書室があるが、これについても山大についてはよく知らない。

自分の図書館利用はごく平均的な教員の水準である。図書館の利用にたけた達人でもなければ、寄りつきもしない無縁者でもない。少なくとも週一の割合で足を運んでいるような気がする。その動機は、紀要や学術雑誌の論文複写、専門書の検索、趣味の読書である。まず雑誌も含めて専門書のばあい、手許にないとまことに不便で仕方がない。専門とする考古学のばあい、自分の手許にあるナマの研究資料、実物はごくわずかで、それを膨大な図書資料と突き合わせ、比較研究する。理想的には大テーブルに現物を置き、あの本、この本に載る写真、図をかき集めて、それらを上手にテーブルに配置することができたら、いちおう研究の方針が定まる。これは理論よりも試行錯誤の経験であって、未知の物を研究するというよりも初歩的な作業である。この作業はある程度は頭のなかにテーブルを仮想してもできるが、豊富な図書のストックが必要なことに変わりはなく、仮に一つ一つ貸し出し手続きをすれば、著しく能率が低下する。それだけならまだしも、たぶん気が散って考えもまとまらない無意識の損失が多量にある。

さてその一方で、さすがに公費で購入する図書は減少しても、寄贈による献本は相変わらず多く、困るのは本の置き場である。総合図書館の書庫には研究室と現在、ほぼ等量の専門書というべき発掘調査報告書が架蔵されているが、たぶん登録、配架に手一杯で、整理に手がまわ

っていない。口では「集中管理」といっても、2カ所に泣き別れて、さらに館内の移動があって、背文字すら読めない横置きが多い。まことに不便で仕方がなく、現在も引用したい報告書が出てこないのも、肝心の原稿が先に進まない。もっとも、この点は研究室の実態を思うと痛み分けて、お互いに不自由を分かっしかない。良くいえば、これじたい英知の産物といえなくもないが、場所が狭いのはそれにしても困ったことである。

上に述べた件は、自分の専門分野にかんすることだが、図書館の基本方針にかんしても感ずるところがある。もう二十年以上前、赴任した頃の頃だが、書庫に自由にに入れるいっぽう、開架の自由閲覧室がある。どうも中途半端とおもいうが、結局使い勝手からいうとこれでよいと思うようになった。さらに旧製の図書が地下の可動書架と最上階にある。まさに死蔵で、図書館にとっても十進分類法は鉄則ではないか、と思うが、どうも現状のまま行くしか手がないように思う。

他の大学図書館といっても、自分の知っている範囲に限られるが、山大の総合図書館の特長は、電子化がかなり進んでいることと閲覧室に余裕があることである。この2点を、比較して感ずるが、はたして図書館の職員の見方は如何。さて、この2点には図書館がほんらい果たすストックとフローの2機能をどのように振り分けるのか、難しい問題がある。特に文系と理工系では差がある。

文化系の学問は根本にさかのぼらなくてはならないことが多い。理論や実験を積み重ねて集積できる自然科学や工学とちがって、たとえばアリストテレスのような哲人、漱石のような作

家が亡くなれば、後の者もまた根本から出発しなくてはならない。猫を犬に置き換えた「我が輩は犬である」という小説を書くことじたいにたいした意味はないだろう。しかし、治療でこの薬を加工すれば、別の病気に効くという実験は重要なはずである。私事でいえば、西洋の古本屋の通販は掘り出し物が航空便による発注では、後手に回り悔しい思いを何度かしたが、インターネットのおかげでひがみ根性だけは解消した。西洋の古本屋はユダヤ系が多いと聞いているが、そのためか送金口座が多国籍、多通貨にわたり、これを郵便局で一番安く送金するのにたいていリアクションがある。たぶん公費注文もできるのであろうが、煩雑のようなので見送っている。現物と一緒に動くインボイスだけで決済できると、とても勝手がよいのだが。

図書館もたぶん、電子書籍の普及など、周辺環境の利便性に対応してゆかなければならない。しかし根本にさかのぼらなくてはならないとき、動かし得ない事実を確実に押さえる必要が生ずる。例えば、以前の号にはWeb上のHPの引用の仕方([Vol. 24, No. 1, p. 9](#))がQ & Aで紹介されている。このこと自体は結構なことであるが、はたして指示どおりタイトルと<URL>を示しただけで大丈夫であろうか。このロケーションが何かの事情で突然消えれば、第三者は追認できなくなる。電子化が進めば進むほど、これが現実に頻繁に起こることは皮肉な現象である。図書館には管理者がいるが、Webは全体の管理ができないのだから、少なくとも先のURLを記した後に「誰がいつ見たか」という事実を書き添える必要がある。

もう一つ、閲覧室の余裕についてであるが、夏休みのような休業中はいつそう目立つ。エアコンは利いてはいるが生ぬるい。こんなことなら、第3閲覧室のエアコンは切って、代わって書庫側の閲覧室の室温をその分低く、快適に設定したほうがよいのではないか。今年、郷土資

料が閲覧室を食い始めたが、自分などは検索の不便を思うと、なぜもっと置かないのか、と思う一派である。

勝手な意見ついでに、思いつくところを以下に記す。

岩波版鷗外全集の全半に欠巻があり、揃っていない。岩波版は定本なので特に気になるところである。

貴重書のラベルがあり、館外持ち出し禁止となっている図書の内、とくに美術書などは機械印刷本であるかぎり2部、同じ物があれば1部は貸し出しに廻してもよいのではないか。

市町村史のたぐいの自治体史は寄贈とか教員の発注とかを待たず、図書館として独自に収集しないと充実しない。最近、配架がわずかばかり改善されたが、姿勢をととても評価しており、ありがたい。この作業はどうしても司書の分野であるが、予算があつてよいと思う。

新書、叢書、選書などの他分野にわたる企画物の配架は、書店のように一括していただくのが、自分には分かりやすい。めどとして50冊を越えればあい、まとめては如何。

外部からの現物貸借、或いは複写依頼で時々、職員が手前どもにお越しになる。その折り、依頼主がこちらに誰と分かる。これはプライバシー保護のため図書館職員で留め置く情報であつて、開示すべきでない。

以上、編集者のお言葉にあまえて、筆がすべり好き勝手を並べてしまった。山大の図書館は利用者優先の姿勢が強いとの一般的な印象をもっている。この美風が絶えることのないように願うとともに、日頃のサービスにかんじてこの場をお借りして御礼申し上げる次第である。

(なかむら ともひろ)

図書館でホットチョコレートを！

人文学部国際コミュニケーション講座助教授 太田 聡

春休みの図書館で

今年の春休みは、かなりの時間を本学の図書館で過ごした。本や会議の資料等で年々手狭になっていく自分の研究室を抜け出して、気分転換がてら、たまには広い図書館で読みかけの論文を読もうと思ったからである。人で込み合っている図書館は、どうしても気が散ってしまうのだが、春休み期間中の図書館は利用学生も少なく、結構集中できて、なかなか居心地がよい場所だった。迷惑セールス電話がかかってきて邪魔されることがないのもよい。ところが、自分の部屋にいる場合と違って、一つとても不便に感じるがあった。それは、館内で飲食できないことである。日頃、図書館を利用すると言っても、ちょっと検索をするとか、必要な本を探して借りたりコピーをしたりするだけなので、館内滞在時間はたいてい1時間以内である。そのため、飲食禁止という図書館の規則に、不便さを感じるなどまったく無かった。ところが、丸1日図書館で過ごしてみると、「館内飲食禁止」、「飲食物を持ち込まないで！」という張り紙がなんとなくとましく思えたことか。「長時間図書館を利用することを禁ずる」と言われているような気さえた。疲れると甘いものが欲しくなる、という経験は多くの人にあると思うが、小生は、難しい論文を読んだり、なにかアイデアをひねり出そうとして、頭を酷使するときは、チョコレートやアイスクリームの類が無性に欲しくなる。だから図書館にも、鞆にチョコを忍ばせて行きたくて仕方がなかった。また、自分の部屋でならば、コーヒーやお茶をちびちび飲みながら、読んだり書いたりしたいものである。しかし、図書館での場合は、昼食後などにペットボトルを買っても持ち込めない

——持ち込めば規則違反者になる——というのが、実に恨めしかった。喉が渇いたり、おやつが欲しくなれば、休息を兼ねて、館外の食堂や売店や自販機のあるところに行けばよいだけのことでないか、と思われるかもしれないが、ちょっと喉を潤したり、ほんの一口甘いものが欲しいときに、いちいち館外に出なくてはならないのは、とても面倒であり、ペースも狂ってくる。しかも、外で買ったものは全部飲み干すか食べ尽くさないと、持ち込み禁止なので再入館ができない、というのはすこぶる不便・苦痛であった。さらに、館内では、飲食禁止の張り紙と並んで、「所持品にご注意！」、「席を離れる時は、貴重品を必ず身につけて下さい。」といった張り紙も目に付く。つまり、大変残念なことに、館内で盗難が多発していますと警告されているわけだから、高価なものなど持たない私も、休憩で席を離れるときは、財布だけでなく、一応荷物を全部デイパックに入れて持って出ていく。盗まれるような貴重品はなくても、金目のものがないかと物色されること自体が嫌だったからだ。ところがそうすると、戻って来たときに、せっかく朝一番にやって来て確保した一番端にあるお気に入りの1人掛けの席に、誰か他の人が座っているということもしばしばで、悔しい思いもした。

図書館の中のカフェ

昨夏、研究仲間のおかげで取れた科研費で、一夏をミシガン州立大学(MSU)で過ごす機会を得た。MSUで開かれていたアメリカ言語学会夏期講座と、同時に開かれていたいくつかの学会に出席するためであった。学内の学生寮に寝泊りしながら、欧米の超一流の言語学者達の集中

講義を受講し、授業や研究発表のない時間帯はほとんど図書館で過ごす、(そして、ときどきサッカーとパーティーでリフレッシュ) というとても恵まれた夏休みだった。MSU のメイン・ライブラリーは、アメリカの大学の図書館にしては、それほど大きなものではなかった(下左側の写真が外観)。しかし、山口大学の図書館にはないものが備わっていて、私には大変ありがたかった。それは、図書館内のカフェである(下右側の写真の“Cyber Café”)。難解な理論・最新の理論に悪戦苦闘しながら疲れ果てた私の脳みそは、このカフェのホットチョコレートやコーヒーとチョコチップクッキーにずいぶん癒された。わざわざ図書館の外のカフェまで行かなくても、図書館の中でお茶にすることができるのは、本当に嬉しかった。図書館に長く居るのがまったく苦にならず、むしろ、楽しみであった。図書館の中では、みな必死に勉強したり、最新の情報を収集したりで、静かだが張り詰めた戦いが行われている。なのに、このカフェの一角だけは、どこかゆったりとした贅沢な時間が流れていた。

一息つける図書館を

上述のように、図書館の中で飲食ができるか否かで、図書館利用者の利便は随分変わってくる。わが山口大学図書館の図書閲覧室の片隅にも、冷たい水が飲めるウォータークーラーは置かれているので、飲み物を持ち込んだりせずとも、喉の渇きはしのげるかもしれない。しかし、読書等で疲れたときに何かを口にしたいくなるの

は、生命維持のためというよりも、むしろ心の栄養のためという面がある。ほっと一息ついたときに、ウォータークーラーの水で済ませよう、というのではあまりに淋しい。そこで提案だが、館内の一角、例えば、本が置かれていない第3(一般)閲覧室の一部でなら、持ち込んだものを飲食しても可(そして、自販機も設置されている)、というような具合にはできないものだろうか。私は、もちろん、図書館の資料の上で飲み食いをして汚すことなど決してあってはならないと思う。貴重な知的共有財産をお菓子やジュースのシミだらけにすることなどもっての外だ。しかしながら、図書館の中の一部をカフェのようなスペースにすることは、図書館をより利用しやすい場所にすることにきつとながると思う。館内のごく限られた場所での飲食を解禁したとしても、書架に並ぶ本までを飲食物で汚して回るような馬鹿者が登場することはないはずだ。ルールを守れる人達・良識を持った人達ならば、館内で飲食しても何の問題も起こさない、と信じたい。学生や教員達に、そのくらいのわきまはありそうなのだが……。自身の体験からしても、若い学生時代に、1日の半分は図書館で過ごすというような時期があってもよい、いや、むしろそうした経験が必要だと思う。そして、そうしやすくするためには、図書館の中にもほっと一息つけるスペースがあるべきだと思うのである。「館内飲食禁止」という張り紙が、「喫茶コーナーあります」というようなものに替わる日が来ることを願いたい。

(おおた さとし)



MSU 図書館



館内のカフェ

図書館の名称変更と事務組織再編について

山口大学図書館は、これまで山口大学附属図書館として山口地区の本館、宇部地区の医学部分館、工学部分館の3館で図書館活動を展開してまいりましたが、平成16年4月国立大学法人移行に伴い、館名も新たに「山口大学図書館」と改め、本館を「総合図書館」、医学部分館を「医学部図書館」、工学部分館を「工学部図書館」とそれぞれ名称変更を行いました。

また、従来、館長、分館長制度であったものを、3館に副館長制度を取り入れ、各館の特徴を生かしながら「知の広場」として新たな図書館活動を開始しています。

一方、平成15年度に「情報」をキーワードに図書館、メディア基盤センター、埋蔵文化財資料館が一体的運営を目指して「学術情報機構」を発足し、新たな組織として情報を核とした各種事業を展開することになりました。(詳しくは、前号「24巻3号」で「[学術情報機構の立ち上げ](#)」という稿で福政館長が述べられています) この責任者は学術情報担当副学長で、機構長と図書館長を兼任していますが、将来的にはメデ

シア基盤センター長、埋蔵文化財資料館長も務める予定です。

図書館委員会組織も、「学術情報機構運営委員会」を親委員会として、下部組織として「図書館専門委員会」が設置され、そのまた下部組織として各地区の「図書館部会」を設置しています。

次に、事務組織は、従来の附属図書館事務組織を一元化して、事務局に組み入れられ、新たに「学術情報部」となり、1部2課(学術情報課、情報サービス課)体制で、平成15年度に発足した「学術情報機構」の3施設の事務を、平成16年度から処掌することになり、既に1年を迎えようとしています。

事務一元化に伴い、係の新設、名称変更も行っており、学術情報課の中に新たに情報系として、情報企画係とシステム管理係の2係を設置しています。

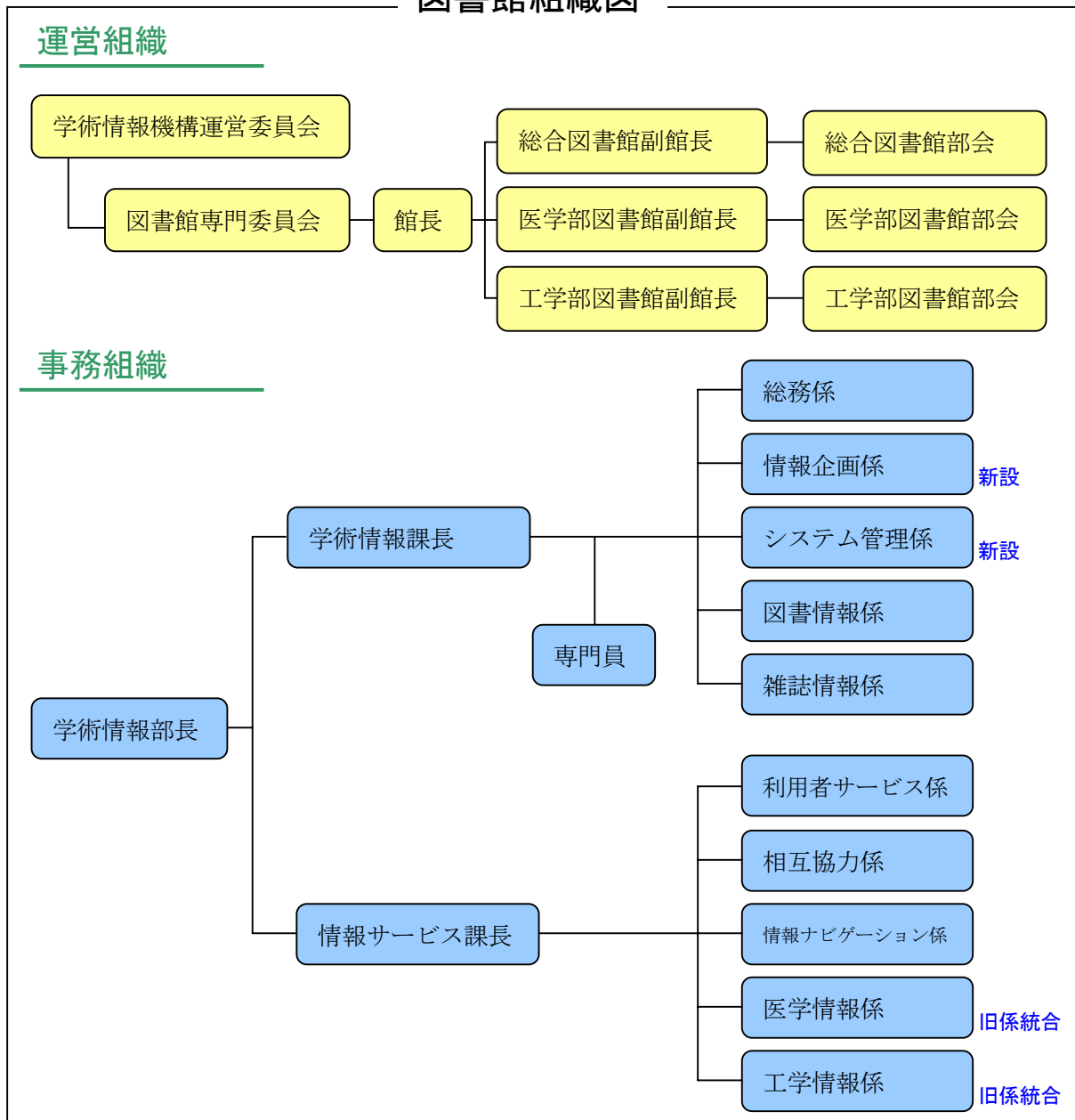
(学術情報課専門員 上田 照賀)

以下、図書館名称変更と組織再編に係わる図書館組織構成図を示します

図書館名称新旧対照表

新名称	旧名称
山口大学図書館	山口大学附属図書館
総合図書館	本館
医学部図書館	医学部分館
工学部図書館	工学部分館

図書館組織図



係名称新旧対照表

新名称	旧名称
相互協力係	情報リテラシー係
情報ナビゲーション係	メディア情報係
医学情報係	(医学部分館) 情報管理係、情報サービス係
工学情報係	(工学部分館) 情報管理係、情報サービス係

トピックス

●新入生オリエンテーション

平成 16 年度図書館新入生オリエンテーションは、学部・学科等を単位に時間割を組み 20 名程度のグループで館内ツアーを行いました。1 回 60 分で、入館の仕方、資料の配置、貸出・返却、情報ラウンジ、蔵書検索の説明を行いました。また、ツアーの最初にはメディア基盤センターから、ネットワークを利用する上で注意すべきことの説明がありました。

結果、1,531 人の参加者がありました。参加できなかった方には、後日、個別に説明をうけてもらいました。



●図書館常設展示

図書館では、昨年度より、山口県出身の人物に焦点を当てた常設展示を行っています。パネル等で内容をよりわかりやすく、親しみを持って見ていただけるよう工夫を凝らすと同時に、図書館所蔵資料から、テーマに関連したものを紹介しています。

平成 16 年度第 1 回目テーマは
「日露戦争と長州人」

(総合図書館 7/9-12/28

工学部図書館 1/7・展示中)

平成 16 年が日露戦争からちょうど 100 年目に当たること、乃木希典、児玉源太郎ら、多くの山口県出身人が関わっていることから取り上げました。

第 2 回目のテーマは

「大村益次郎」

(総合図書館 1/7～展示中)

大村は山口市の出身、村医者から長州藩に仕える

兵法家に身を転じ、数多くの功績を残しました。



●SciFinder Scholar 講習会

吉田、常盤キャンパスの 2 会場で、化学情報協会より上野講師を迎えて SciFinder Scholar の講習会を開催しました。

SciFinder Scholar は、化学情報を必要とする研究者向けに作成された化学情報データベースです。講習では、キーワードからの検索方法、化学反応からの検索方法等、様々な機能について解説していただきました。

7 月 14 日(水) 吉田キャンパス

7 月 16 日(金) 工学部図書館



●学校訪問：図書館見学

学校訪問の一環として、県内外の高等学校から多数の方が図書館見学にこられました。高校生ばかりでなく、PTA、教職員の方々も多数おいでになられ、大学図書館の蔵書数の多さや学習施設の内容に興味を示されました。

総合図書館

県内) 高森高、岩国総合高、野田学園高、
県外) 広島県立安古市高、島根県立益田高、
福岡県立田川高

工学部図書館

県内) 柳井高、岩国高

医学部図書館

県内) 高森高

●目録システム地域講習会開催

平成16年度目録システム地域講習会を8/25-27本学と国立情報学研究所との共催で開催しました。受講者は、中四国地区の国公立大学図書館職員14名で、講師は本学から2名の他、岡山大、広島大、愛媛大から各1名の応援をいただきました。講習内容は、目録システム概論に始まって、目録情報の基準、目録検索と検索実習、目録登録と登録実習等、講義に実習を交えながら行いました。



●山口県図書館振興県民のつどい

10月30日(土)、山口県立山口図書館において、第6回図書館振興県民のつどいが開催されました。「図書館を身近なものにしていくために」をテーマにした催しで、本学も山口県大学図書館協議会

の企画、「私たちの大学図書館展」に参加し、広報展示や朝日新聞検索ツール「聞蔵」のデモ紹介等を行いました。

●学術情報機構 2004

11月6日(土) 姫山祭に合わせ、企画展「学術情報機構 2004」を開催しました。このイベントは学術情報機構三組織の図書館、埋蔵文化財資料館、メディア基盤センターの共同企画で、内容としては

○「日露戦争と長州人」(常設展示)

○「絵本展」

○「資料で見る古代の周防国」

(第20回埋蔵文化財資料館企画展

「古代の周防国」との連携企画)

○山口県立大学華月祭との間の同時実況中継

(同日に開催された県立大学祭の様子を、図書館玄関のバーチャルロビーにて放映)

当日は、図書館の通常開館を実施しながらのものでしたが、一般市民約200名もの入館がありました。今後もこのようなイベントを開き、学術情報機構の活動を、学内および地域の方々にPRしていきたいと考えています。

詳細は下記ページを御覧ください

<http://www.lib-c.yamaguchi-u.ac.jp/katudou/tenji/2004open/>



● 図書館システムが変わります！

3月末に図書館システムをリプレースします。

新システムでは、蔵書検索機能の強化、リポジトリシステムの導入等を予定しています。リプレース作業のために、3月中旬からサービスの停止を予定しています。利用者の皆様には、ご不便をおかけいたしますが、ご理解、ご協力の程よろしくお願いたします。

本学関係教官著作物寄贈図書

寄贈者	書名
矢野宏二	日本産昆虫の英名リスト
森下徹	近世瀬戸内海地域の労働社会
白水完児	家畜病名彙(中央獣醫會雑誌；11 輯卷 6 付録)
白水完児	日本の獣医学の発展に貢献した人
白水完児	すべては江戸時代に花咲いた：ニッポン型生活世界の源流(現代農業；1996年2月増刊)
塚田広人	失業と雇用をめぐる法と経済
宮崎充保	言葉のからくり：河上誓作教授退官記念論文集
末松 壽	物語論：プロップからエーコまで
小谷(三浦)典子	企業の社会貢献とコミュニティ
瀧 厚	日本近代史概説
瀧 厚	有事体制論：派兵国家を越えて
田中 理絵	家族崩壊と子どものスティグマ：家族崩壊後の子どもの社会化研究
澤 喜司郎	経済社会と港湾(現代港湾シリーズ 1)
五島 淑子	オーストラリア・ニュージーランド(世界の食文化 7)
山本 真弓	言語的近代を超えて：〈多言語状況〉を生きるために(明石ライブラリー)
日下 達朗	赤土の保全：農業農村整備と水域環境の調和をめざして
友定 啓子	保護者サポートシステム：もう一つの子育て支援
山勢 博彰	院内エマージェンシー：急変時に対応するための知識と技術
宇佐美 謙治	総合人間科学：ヒト・ひと・人・人間・人類の科学
溝田 忠人	Comprehensive handbook of calorimetry and thermal analysis
田淵 義彦	建築大辞典

編集後記

法人化された後の館報をようやく出版させることができました。特に寄稿していただいた執筆者に方々には出版が遅くなりましたことを深くお詫び申し上げます。さて今号からは印刷体から決別し電子媒体のみで出版す

ることとしました。紙を配ることはなくなりましたが、ポリシー等は引き継いでいきたいと考えておりますので、今後ともご愛顧いただきますようお願いいたします。(0)

山口大学図書館報 「Library News」
No. 70 2005年2月28日発行
<http://www.lib-c.yamaguchi-u.ac.jp/>

編集・発行 山口大学図書館
〒753-8516 山口市大字吉田1677-1
TEL. (083)-933-5183 FAX. (083)-933-5186